

# 加齢研ニュース

平成 25 年 12 月 1 日  
東北大学加齢医学研究所  
研究会同窓会発行

## 【所長室便り】

佐 竹 正 延

### 1. 任期, 最後の報告です。

福田寛先生退職後の機能画像医学研究分野に、8月1日付けで、瀧靖之先生が教授に発令されました。既に、本学・メディカル・メガバンク機構 (TOMMO) 教授として着任されていましたが、1年後に加齢研に戻ってきて頂きました。TOMMO は引き続き兼務して頂き、バンク事業である脳 MRI 画像収集に協力することになります。また、大学病院では放射線科の1つ、加齢核医学科を、さらにサイクロトロン・RI センターの診療所長を担当します。人事で喜ばしいニュースが、もう1件あります。臨床

腫瘍学分野の加藤俊介准教授が、12月に順天堂大学・医学部教授に栄転することが決まりました。順大といえば私学医学部の一方の雄であります。加藤先生にとっては勿論、臨床腫瘍学分野・加齢研にとっても荣誉なお話であります。

「賞」方面にも、嬉しい話題があります。平成 25 年、大きな賞を授けられた加齢研教員は、お二人いらっしゃいます。第 62 回河北文化賞が川島隆太教授に。「大脳の前頭前野を活性化させる学習療法を開発、脳機能向上と認知症ケアに貢献した功績」が評価されました。研究所からは以前に、鈴木千賀志先生 (外科学)、藤村重文先生 (呼吸器再建) が同賞を受賞されており、川島先生で3人目になります。次に、寄附研究部門の渡辺 彰教授が、第 65 回保健文

## 加齢研ニュース 第 60 号 目次

所長室便り (佐竹 正延) .....	1
新任教授挨拶 (瀧 靖之) .....	6
分野紹介 (遺伝子導入研究分野) .....	8
受賞挨拶 (渡辺 彰) .....	10
随 想 (月浦 崇) .....	12
研究会便り (杉浦 元亮) .....	13
所内人事消息 .....	15
研究会同窓会広報 (佐藤 靖史) .....	17
編集後記 .....	18

第 13 回加齢医学研究所研究会同窓会・講演会

日 時: 平成 26 年 6 月 28 日 (土) 午後 5 時から

講 師: 吉田 浩氏 (東北大学大学院経済学研究科・加齢経済・財政学担当 教授)

テーマ: 加齢経済学で予測する「極」高齢社会の日本

化賞に輝きました。東北大学出身の教授では6人目、研究所では2代目所長、海老名敏明先生以来の快挙です。「結核診療医師の育成と、2009年新型インフルエンザに際しての、効果的な対策指針の発出」が、評価されました。

しかしながら、人事で起こるのは、めでたい事ばかりとは限りません。基礎系の研究室の場合、教授の退職とともにそのプロジェクトは終了、研究室も廃止となります。そして、新任の教授は全く新しい研究室を立ち上げるのが、現在の研究所の慣行となっています。そうしますと、教授退職の際に、それまで教授と一緒に研究していた教員が、そのまま研究所に在籍するケースが起きます。教員の方にはプロジェクト研究推進分野に移ってもらっていますが、現在、当該分野には3名の准教授、1名の講師が所属しております。4名の方々はそれぞれ研究テーマが全く異なります。よって、実質的には1人・1研究室が、4単位も研究所に存在する事態となってしまいました。効率的な研究体制とは申せません。

そうかといって、教授退職に合わせて、教員に辞めて頂く訳には参りません。そういった観点から、現在はパーマネントである准教授の職位にも、任期制を導入する議論をしております。加齢研の助教に任期制を導入したのは、新教員人事制度が発足した平成20年のことです。それ以降に採用された助教の方は全員、任期が付いているか、年俸制かです。以来、5年半が経過して現在、パーマネントの助教は研究所に、たったの3人になりました。ルールの変更が、組織の変貌に如何に強力に作用するかの例証でもあります。故に、准教授の新しい任期制への移行については、慎重に検討を進めています。

一方、臨床系研究室にあっては、教授の退職と新任教授の着任は、基礎系研究室におけるそれとは、全く異なる要素を考慮する必要があります。臨床というからには当然、診療業務を担っ

ている訳で、この業務は、教授の在・不在とは関係なく遂行せねばならない。連続性が重要であり、基礎系研究室のプロジェクトのように、教授の1代限りであってはならず、人員を濃厚に切れ目無く配置する必要があります。自分は基礎医学系の人間ですが、所長として初めて、基礎と臨床の研究室の相違を学びました。

「大学ミッションの再定義」に関しては、東北大学の医学系分野として、加齢研は医学系研究科と一緒に、文書を作成。文科省の医学教育課・学術機関課と内容調整の上、6月に提出しました。近日中に文科省から公表の予定ですが、加齢研は文書の中にしっかりと書き込まれ、位置づけされております。

加齢研は平成22年度から、共同利用・共同研究拠点の1つ、「加齢医学研究拠点」として活動しておりますが、過去3年間を対象に、文科省の中間評価を受けました。5月に中間評価用調書を提出、9月に結果を知らされました。SABCの4段階評価で、Aでありました。「時代の重要なニーズを的確に捉え、加齢を軸としてバイオメディカルサイエンスの幅広い領域から優秀な研究者を集結させ、活発な研究活動が進められている」とのコメントです。知らせを聞いて正直、ホッと安堵しております。なお、全国の国立大学法人には、医学系の拠点(≒附置研究所)が18カ所あるのですが、S評価が2拠点、B・C評価がそれぞれ1拠点であり、大多数(14拠点)がA評価という、「丸く収まる」「大人」の判断に見えました。しかしながら、実際に評価を受けたり、ミッションを再定義したり(されたり)するのは、大変な作業・労力を要します。結果の如何によっては、組織の存在意義が厳しく問われるのですから、当然です。

東北大学総長に里見進先生が就任されて、2年目。リーダーシップを文書としても示す必要から、里見ヴィジョンが策定されました。キーワードは2つで、「ワールドクラスへの飛躍」

と「復興・新生の先導」です。この大学全体のビジョンと併行して、部局独自の取り組みも求められ、加齢研もビジョンを定めました。大学の華々しさに比べると、加齢研版はぐっと、地味なものです。部局としては、着実に実行可能であろう事柄を列挙するのですから、堅調になるのは致し方ない事ではあります。ただし、ビジョンを定めるのは結構なわけではありませんが、問題が無い訳ではありません。里見ビジョンも部局ビジョンも、里見先生が総長に在任する期間の話であります。一方、大学なり部局には、中期目標・中期計画（現在は第2期）なるものが設定されております。ところがビジョンと中期計画の期間は、始期・終期がそろっている訳ではないのです。内容に整合性があるか否かも、不問に付されております。その上、総長任期と部局長任期は、全くシンクロしていないのです。ビジョンと中期目標・計画の2つ、大学と部局の2つ、よって加齢研としては、 $2 \times 2 = 4$ 条件を満たすよう努力せねばならない訳で、本当に大変です。ビジョンであれ中期目標・計画であれ、「ヤレ（命令）」とか「ヤル（意思）」とかの統一的決定が、各々の組織において、どの様なプロセスを経て為されているのかは、自分も当事者の一人でいながら、よく分からないという、分からなさ加減は、いつものことであります。

さて加齢研は震災後の2年半この方、工事と引っ越しの連続でありました。建物の壁面・壁中に入ったクラックの補修。研究室の高層階から低層階への移動。3人もの教授の方が退職されたので、それに伴う研究室の引っ越し。移動した所具も、事務さんの手配も、何から何まで大変であった事と思います。7月頃ようやく、全て落ち着きました。

そこで、その落ち着いた目で、我が加齢研のキャンパス風景を眺めてみましょう。北六番丁から加齢研の玄関方面を望む景観は、学内随一

の美しさではないかとは、私の密かな観察です。向かって右手に新築のスマート・エイジング棟、正面にプロジェクト棟、左奥に実験研究棟。いずれも、ポストン・ブラウン調のタイル貼りの建物です。そして、両側にけやき並木が聳える、しっとりとした仕上げの、玄関までのアプローチ。うーむ、美しい。自分は加齢研で働くことが出来て、大いに幸せである。そういう気分させてくれます。「研究で大事なのは研究費。お金が全てだ」との見解には私、全然、賛成できないでおります。学生さんやスタッフの皆さんが、美しい大学で学び、研究に励んで下さるのが、私の願いです。

「加齢疾患モデル総合実験施設」は、現在のRI管理区域を解除し、RI棟を改修、さらに新・動物実験施設を増築する計画です。大学でS判定に拾って頂き、文科省から財務省へと、概算要求として上がっていきました。何れは実現できるものと期待しております。ついでに申しますと、加齢研の建物は、内部も素敵ですね。どこかの何号館の様に、エレベーターを降りると、四面が壁・部屋の密封空間である、なんてことはなく、外の景色が見え、採光のある開放的な造りになっております。

研究会同窓会からの報告が1つ。6月29日の総会にて、「ヒメル咲子記念癌制圧基金」の解約を私から提案、了承されました。本基金については、ヒメル氏からの寄付の経緯、基金の使用について知る方は、現在の研究所にはどなたもいらっしゃらない事。平成12年2月24日の残高、1,309円が増減なく現在まで続いている事から、その使命を終了したと判断し、通帳名義人である渡辺民朗先生（元、加齢研所長）に解約手続きを行って頂きました。解約利息3円を含めた1,312円を、研究会同窓会の通帳に入金しております。以上、御了解頂ければと存じます。

報告の最後は、記録についてです。この原稿

が掲載される「加齢研ニュース」は、第60号です。第1号が発刊されたのは、昭和59年(1984年)6月1日ですので、1年に2回の刊行を、30年間、継続してきたこととなります。抗酸菌病研究所設立以来、絶えることなく継続して刊行しているのは「年次要覧」で、これは研究所の研究活動(論文と学会発表のリスト一覧)の公式記録で、加齢研に改組の平成5年以降は、2年に1度、刊行しております。あとは1993年刊行の「抗酸菌病研究所 50周年記念誌」と、2011年刊行の「加齢医学研究所 創立70周年記念誌」の2つ。歴史を紙に記録したものは、上記の4つ。これだけが研究所や研究会同総会が、後世に残すものとなります。ゆえにこのニュースも、気合いを入れて書かねばならないのです(そのつもりですが)。

## 2. 私はジェニファ。

研究者の世界の特徴の1つは、研究成果の公益性にあります。発表論文は通常、世界中の研究者が閲覧可能です。また、義務ではありませんが、研究材料についても、できるだけ互いに融通することが推奨されています。こうしたシステムが、科学研究の普遍性を担保するのに大きく貢献している訳です。それで私のような、分子・細胞生物学の領域で研究している場合、遺伝子のcDNAや抗体の分与を求められることが、時々あります。それらの送付は割と簡単。が、なかなか厄介なのは、遺伝子組換えマウスを分与する場合です。しかも外国に送る段になると、はなはだ煩雑な手続きを必要とします。安全保障輸出管理、遺伝子組換えの情報提供、マウスの健康証明書、先方の機関とのMTA、税関の書類、運送業者の手配、などなど。自分1人が海外旅行に行く方が、マウスを旅立たせるより、手続きははるかに簡単な気がします。

さて、そんな空飛ぶマウスを巡っては、外国人研究者と、しかも見も知らぬ人とメールの遣

り取りをすることと相成ります。「私は、ピッツバーグ大学のジェニファ。頭頸部腫瘍を研究しており、ついては貴殿のマウスを分与されたし」とのメールをもらったのが、今年の初めです。サラサラと、たったの数行しか書かれていないので、面喰いました。というのは、こういう依頼の書面には通常、少なくとも自分の職位(教授とか)、学位(MDとか)、所属研究機関(××大学、○○学部、△△研究室)、住所、連絡用のメール、電話番号などを書き入れます。それによりメールを受け取った当方としては、先方がどこのどなたであるかを認識し、安心して(また、競争相手らしい時は、心配しながら)、交渉を開始するのです。ところが比度の情報は、「ジェニファ」と「ピッツバーグ大学」だけ。どこの何者か、皆目不明です。こんないい加減な、ものの頼み方をするのは、まだ外交儀礼の何たるかもわきまえない、学生かポストドクであろうと判断したのでした。

ところが、ところが、何度か彼女とメールを交換しているうちに、駆け出し研究者にしてはどうも様子がおかしい。何となく先方には、自信と気力に溢れた、練達の研究者であるような雰囲気が漂っているのです。そこで、「あなたは、そもそも何者ですか?」と尋ねる前に一応、インターネット検索することにしました。馬の骨なら、URLなどヒットするはずもないからです。ですが、メールにある手掛かりはたったの2つ。「ジェニファ」と「ピッツバーグ大学」。仕方なくそれだけをキーワードに入力し、検索ボタンをクリックした所が、出て来る、出て来る。たくさんヒットしたURLの中の説明文で直ぐに目を惹いたのは、“リーディング・サイエンティスト”と、“ディスティングウイシュト・プロフェッサー”。大変に驚きました。少なくとも“頭頸部のがん”で、あるいは“ピッツバーグ大学”では、先導的にして著名な研究者らしいのです。どこのウマのホネか分からな

いのは、ジェニファではなく、この私、MASA でありました。

### 3. 咽頭下垂体。

所蔵しているダンス音楽の CD 中に、メロディの大変に美しいワルツがあって、題名は“Jerusalem of Gold” 訳せば「黄金のエルサレム」管弦をバックに、女性ヴォーカルの歌唱がついており、3部から構成されています。といっても、長さ3分位のワルツゆえ、1部が1分もかかりません。そして第1部と第3部は、英語の歌であり、「羊飼い」「教会」「祈る」「栄光」といった、それらしい単語を聞き取ることが出来ます。摩訶不思議なのが第2部。今までに聴いた事もないような言語での歌なのです。私の知る外国語は英語のみですが、仏・独・西語なら、何となくそれであろうと分かります。しかし、それらの何れでもない、エキゾチックな響きなのです。曲の題名が「エルサレム」なのですから、おそらくはヘブライ語であろうと、見当をつけたのですが、さて、確認する手だてがありません。

どうしたものか、考えあぐねていた時分に開催されたのが、6月の東北大学—米国 NIH 合同シンポジウムでありました。大内憲明医学系研究科長が（私もですが）、NIH 留学組であることから一生懸命に取り組んで下さり、シンポは盛況でありました。東北大学を訪問した NIH 研究者には、ユダヤ人は居ませんでした。研究者の世界におけるユダヤ人の存在には圧倒的なものがあります。そこで、NIH 研究者に尋ねてみたものです。すると、“ga”とか“ha”が多く聞こえたら、ヘブライ語であるとの由。改めて、先述の「黄金のエルサレム」をじっくり聴きますと、確かに“ga”と“ha”の発音が耳につくのです。しかし、その“ga”“ha”は、日本人やアメリカ人の発するそれらとは、大分違う。声楽でいえばビブラート、震える振動音なので

す。一体、どこを震わせる発音の仕方なのであろうか？ またもや想像を巡らしてようやくとどりに着いたのが、ウガイ、含嗽でありました。外出から帰宅後、口に水を含んで、“ガラガラ”とやりますよね。あのウガイで、水を含まずに“ガラガラ”とやって下さい。その折の“ga”は、咽頭下垂体、俗にいう「のど●●●」を震わせております。ウガイをせずに、ウガイの発語をするとは、ユダヤ民族はすごい民族である、と妙に感心致しました。

本稿、第1節で報告しましたように、里見ヴィジョンの柱の1つは、「ワールドクラスへの飛躍」です。東北大学人には益々の国際化が求められる様になりましょう。咽頭下垂体を鍛えねばならない場面も、ひょっとして出て来るやもしれません。

### 4. 黒は白か？

我が東北大学は、「実学尊重」を建学の精神としております。異を唱える訳ではありませんが、私には少々、不満が残ります。ここに言う「実学尊重」とは、徒らなる口舌・思弁を排し、「実業」「実業界」に添った学問を志向する精神を指しているものと推察します。しかしながら、無益どころか有害な、政治上の思想闘争ばかりがはびこった往時とは異なり、現在は頓に、学問の有用性と即効性のみが強調され、背景にある思想や概念が省みられない、軽視される傾向がありはしないでしょうか？ 100年の歴史を振り返っても東北大学は、大いなる発明は為したかもしれませんが、思想の1つも生んだことはあるのでしょうか？ 健全な思想あってこそその大学であって欲しいと、私は願っております。

そこで、思想の何たるかではありますが、最も重要なのは、その中味よりもむしろ、その存立条件であると思われまふ。何かを自由に考え、表現して宜しい、ということです。そんなの当たり前ではないか。日本国憲法にも「思想の自

由]が謳われている通りである、と皆さんはおっしゃるかもしれませんが、でも、思想の自由は本当に、無条件・自動的に、保証されているのでしょうか？ 検証してみないと分からないのではないかと、というのが私の心配です。

話は跳びますが、8-9月に日本全国のお茶の間を席卷したのが、テレビ・ドラマ「半沢直樹」であります。融資を巡る銀行内部の対立であって、大学や思想とは一見、何の係わりもございません。その最終回、9月22日の放映で(42%の視聴率を記録したといいます)、役員会議に呼ばれた半沢次長が皆に訴えたのは、「黒を白と言いつくす欺瞞(即ち、思想の表明が制約されている状況)は、もう止めようではないか。事態を直視せよ。黒は黒である」白熱した応酬の後、遂に大和田常務を屈服させた時は(大分、芝居がかっていましたが、芝居なのだから、当然です)、全国民が「その通り」と喝さいを挙げたものと想像します。ところが、それを受けての結末。何と、悪の権化の大和田常務は懲戒解雇どころか、常務をはずされただけ。一方、正義を貫いた半沢次長は、出向という名の左遷。この人事を二人に言い渡した頭取の言葉は、極めて興味深いものでした。「銀行は、正義・不正義で動くものではない。人材の、有用であるか否かを見て動く。それが銀行の統治である」と言ったのでした。日本国民は先のシーンを忘れ、再び、「そうだ、そうだ。組織の統治とはそういうものだ。単純に白黒で割り切れるものではない」と、溜飲を下げたのでしょうか？ 或いは私のように、割り切れなさが残ったのでしょうか？ 「統治」の正当性を言いたかったのか、ブラック・ユーモアのつもりだったのか、何だったのか、今も私は、制作者の意図を推し量れないでいます。

それで、東北大学に話を戻しましょう。国立大学が法人化されたのは、平成16年(2004年)、今から9年前のことです。それ以来、法人の管

理運営については、トップ(大学全体では総長。各事業場にあつては事業場長、即ち研究科長や研究所長)のリーダーシップとガバナンスが、大いに重要視されてきております。指導も統治も結構であると、私も否定はしないのですが、それは、組織の管理運営に限っての話であります。大学の使命は真理の探求にあるのであって、それを教育と研究の両面から実践するのが、ヨーロッパ流の昔の考え。この「真理を探求する」為には、「思想の自由」が必須の条件です。そして「管理運営」は元来、真理探求や思想表現の営為を担保する為にこそあるはずなのです。でも昨今は、ちょっと逆。激化する一方の、国内・国外での大学間・研究者間の競争に放り込まれ、大学も研究者も生き残りに必至です。さすれば、現代アメリカ風に、指導と統治でもって生存戦略を図るのですが、それが行き過ぎて、研究成果の有用・即効のみを求め、時間のかかる真理探究や思想構築に対して無関心、さらには制限的に作用しないとも限りません。東北大学は「実学」指向であって、あまり「思想」の重要性については、深い洞察を巡らさない傾向の大学かもしれない、ちょっと、残念な感じが致します。

### 【新任教授挨拶】

機能画像医学研究分野  
瀧 靖 之

2013年8月1日より東北大学加齢医学研究所機能画像医学研究分野第四代教授を拝命しました瀧 靖之と申します。これまで菅野教授、松沢教授、福田教授が築いてこられました本研究分野の運営を引き継いでいく大役を仰せつかり、大変身の引き締まる思いでございます。しっかりと教室の運営、ひいては加齢研の発展にしっかりと寄与したく存じますので、どうぞ宜しくお願い致します。私は、実は昨年8月に

東北大学東北メディカル・メガバンク機構脳画像解析医学分野教授に着任した際、加齢研も兼務のため、昨年の加齢研ニュース第58号にも新任教授挨拶を書かせて頂きました。そのため、また同じような内容で紙面を埋めてしまうのも申し訳なく、いっそのこと仕事から離れて趣味のことも書こうかなど色々思い悩んだのですが、やはりご挨拶を述べさせて頂きたく、昨年と多少重複がございますが、どうぞ宜しくお願いします。

私は、東北大学理学部生物学科卒業後、再受験にて東北大学医学部に入学し、卒業後、加齢研機能画像医学研究分野に入局し、大学院に進学しました。そこで、放射線画像診断医を目指すため、仙台厚生病院、仙台星陵クリニック、そして東北大学の放射線科で画像診断の研鑽を積みました。放射線科では、中枢神経領域を主体とした画像診断を学びました。その後、助教になってからは核医学診療に携わり、2003年には大学病院におけるPETの立ち上げから関わりました。研究面では、本研究分野は長らく、脳画像研究とPET癌研究の2本柱で来ており、私は主に脳画像研究を中心に関わってきました。まず入局時より、AOBA脳画像研究という、おおよそ2,000人規模の脳MRI、生活習慣などのデータを収集し、中心的に論文執筆などの研究を進めました。その後、この研究を縦断研究化し、データの厚みを増しました。併せて、公衆衛生学、老年内科学、運動学などの先生方と、鶴ヶ谷プロジェクトを遂行し、高齢者の脳形態と認知力の相関などを明らかにして来ました。その後、当時まだほとんど行われてこなかった、健常小児の脳発達研究を、加齢研認知機能発達研究部門で中心的に関わり、小児の脳発達を多く明らかにしてきました。その後、昨年より、メディカル・メガバンク機構に教授として異動し、私はMRI事業を推進する立場として、15

万人の壮大なバイオバンクの構築、その後の解析に寄与していくべく、現在準備を進めているところです。

今後の本研究分野運営ですが、伝統のある本研究分野の良い点をしっかり引き継ぎながら、しかし変えるべき点はしっかりと変えて行きたいと考えております。まず、本研究分野の長い伝統として、先にも申しましたように脳画像研究とPET癌研究の二本柱があります。東北大学では加齢医学研究所においても、医学系研究科、生命科学研究科、脳科学コアセンター等、多くの部局において脳研究が大変に盛んで進んでいる大学です。大規模なデータベースを用いた脳画像研究の伝統をしっかり引き継いで行きたいと考えています。更に、東北大学は、疫学研究においても大変に進んでいる大学であります。脳研究と疫学研究を橋渡しするために、私が兼務している東北メディカル・メガバンク機構との連携をますます深めたいと考えています。このような連携に加え、加齢研の多くの研究分野、放射線診断科をはじめとする多くの診療科や研究分野、サイクロトロン・RIセンター等の多くのグループとも連携することで、脳や認知機能の生涯にわたる維持、認知力低下の一次予防を目指した研究で、今後はますます大いに東北大学の発展に寄与していけるよう、身を粉にして頑張りたいと思っております。

それから、本研究分野のもう一つの柱である、PET癌研究、もう少し大きなくりで言うと核医学診療、こちらの方も東北大学は国内において、スタッフ数に恵まれた大学です。核医学読影を行うに当たり、形態画像診断の知識は必須であり、これが欠けると質の高い読影を行うことなど困難です。今後は、放射線科とますます密に連携を深め、カンファレンスや勉強会などで知識を高め、星陵放射線部門を盛り上げていけるよう、臨床には特に力を入れたいと考えています。更に、臨床と研究を橋渡しする研究

として、核医学と脳疫学研究は、被験者数という点で一見相容れないところがありますが、背景データのしっかりした被験者を対象とした疫学的核医学イメージング研究などで、新しい分野を開拓していきたいと考えています。

また、教育、運営に当たり、私が最も大切にしている考えは、「人は宝」です。組織を運営するに当たり、まず、教室員を増やすこと、更にそれぞれの教室員に合った指導を行うこと、これが私の最も重要な責務であると考えています。本研究分野の発展は、単に我々の発展というだけでなく、加齢医学研究所、そして東北大学の発展に寄与すると考えています。しっかりと本研究分野を発展させるよう頑張っ参りたいと存じます。

私は能力が高い者では決してありませんが、強い信念を持って目標を設定し、そこに邁進する努力だけは誰にも負けないと自負しています。今後、新しい教室作りに、精力を結集して邁進してまいりますので、改めまして、今後とも、ご指導御鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

## 【分野紹介】

### 遺伝子導入研究分野

今年（2013年）の5月頃、米国の有名女優が乳がん予防のために乳房切除・再建を行ったことを公表して話題になりましたが、この例を見るまでもなく現代はゲノム情報を活用する時代です。しかし免疫学の世界ではまだ十分な活用が出来ていません。アトピー性皮膚炎とフィラグリンとの連関は十分確からしいのですが、アレルギーや自己免疫疾患の原因遺伝子はGWAS解析が進められているものの、ずいぶんたくさんあることが分かるのみで、期待していたほど明確ではありません。この理由は主に、ウイルス・細菌感染を含めて日常的に外

的な環境因子に暴露され続ける中で、時間軸とともに経年変化をし続ける免疫のしくみを、まだ私達は理解できていないからだと思います。さらに自己免疫疾患は2倍（リウマチ関節炎や多発筋炎・皮膚筋炎）、9倍（全身性エリテマトーデス）、20倍（橋本病）など、男性よりも女性に発症し易い特徴があります。動物モデルを駆使した長年に亘る研究でも、免疫のシステムが性ホルモンの影響を受けていることは個々の免疫反応の実験系において示されているのですが、未だに性差の原因も明快な説明ができないでいます。

さて、免疫の根幹とも言うべき「自己と非自己を識別するしくみとその維持」は以前考えられていたほど堅牢なものではなく、重要な要素分子はいくつかあるにせよ、本当のところは多様な免疫制御分子群が、避けられない経年変化の中であまきはたらし続けることが大切なのだろうと考えられ始めています。しくみ全体としてはある意味とても不安定で、性ホルモンの変動にも影響され続けているのではないかと思います。最近のいくつかの論文では、自然免疫に影響を与えることが明確になってきた腸内細菌叢が、自己免疫疾患の発症やその性差をも左右する可能性も指摘され、これまで見過ごされていた領域にまで理由を求め始めています。

平成9年（1997年）に縁あって加齢研にラボを持たせて頂いてから私とラボの仲間たちは、それまで取り組んでいた免疫制御の役割を持つFcレセプターと、当時私たちが発見して制御的な役割を想定していたマルチリガンドレセプターであるPir/ILT/LILR（分子ファミリーであるうえ、呼び名がいろいろです）を2つの軸として、免疫の自己反応性を中心に研究を展開して来ました。自己・非自己の識別を維持する仕組みや、病的に多くの自己抗体を作る、そのキーポイントになるメカニズムを突き詰めることで何か新しいしくみが発見できるのではな

いか…それを利用して新しい自己免疫疾患の治療法を考案できるかもしれない、というコンセプトを大切にしてきました。このような興味の下で集まった学生、院生、スタッフ、技術職員などのOB・OGたちは100名を越え、すでにそれぞれの得意分野で活躍しておられます。そのようなメンバーの熱意に支えられながら16年間続いて来た2013年現在の私達のラボの研究内容をご紹介します。

ラボ開設当初から取り組んでいたFcレセプターの研究は、この遺伝子を欠損した同じ親マウスから生まれた子孫であっても研究した大学によって自己免疫疾患の発症率が極端に異なることが分かりました。10年ほど、その原因を探るために純系マウスにバッククロスを繰り返す作業を地道に行って来ましたが、ようやくこのほどFcレセプター欠損そのものの影響を純化して解析する条件が整いました。生命科学研究所から赴任した助教の金成安慶先生が、このマウスの抗核抗体の産生に極端に性差があることを観察しその原因を、10年以上に亘って技術職員を務めている飛内章子さん、大学院生の高橋遥茄さんと一緒に解析しています。この仕事は来年の早い時期に公表したいと考えています。

もうひとつの軸として展開してきたPir/ILT/LILRの研究も、ノックアウトマウスを基盤材料に進め、最近ではとりわけB細胞の制御に重要で自己抗体の産生にも間接的に関与していることが分かってきました。これは金沢医科大学教授に栄転された中村 晃先生をはじめ多くの方々が熱心に進めて来たプロジェクトですが、現在は院生から助教となって活躍中の遠藤章太先生をはじめ院生の木村俊文君が解析を進めています。なおPir/ILT/LILRは最近では神経軸索の伸長阻害、神経ネットワークの可塑性の抑制、さらにはアミロイド $\beta$ のレセプターとしても機能するなど、神経系でも注目される分子群

となってきたのは意外でした。

これら2つの軸で展開して来た免疫制御の基礎的研究に加え、最近ではこれらの制御レセプターを創薬や臨床的な方面に活用できないかと考え、独法研究所、製薬関連企業や大学病院の臨床研究の諸先生と一緒にいくつかの柱を立てて、応用研究にも取り組んでいます。そのひとつは免疫制御レセプターの人工リガンドの開発ですが、産総研の先生と共同で試験管内分子進化法を利用し、免疫制御的にはたらくものをスクリーニングにより見つけ出そうとしています。これは前述の金成先生と院生の安住宗一郎君が取り組んでいます。また従来から急性炎症や自己免疫疾患などに使われている献血血漿由来のIgG製剤がなぜ奏功するのか、Fcレセプターの関与が想定されていますがそのメカニズムは分かっていません。これを探り、新しい抗炎症経路の発見や治療法を開拓しようと、ラボOBでもある講師の乾 匡範先生が製薬関連企業と共同で、院生の田澤樹乃さん、今川美果さん、升野達郎君らと一緒に取り組んでいます。さらに大学病院の先生方と共同で、乾先生、院生の弘田紗瑛子さんらはSLE患者様のB細胞のサブセットの解析を行い、そのPir/ILT/LILR発現から病態を探り、治療に結びつく成果を挙げようと努力しています。

自己免疫疾患の性差の問題も、FcレセプターやPir/ILT/LILRの研究を通してその一端を解明できるかも知れないと期待しています。崩れかかった免疫の制御を立て直すことを目指し、これまで通りのチームワークで一步一步、研究を続けて参ります。

(高井 俊行)

## 【受賞挨拶】

### 第 65 回保健文化賞を受賞して

～自ら考えることが大切～

抗感染症薬開発寄附研究部門

渡 辺 彰

私は、平成 25 年 10 月 23 日の第 65 回保健文化賞授賞式で厚生労働大臣表彰を受け、翌 24 日に皇居で天皇・皇后両陛下の拝謁を賜る栄誉に浴しました。妻を同伴し、両陛下から直接、ご質問を賜り、私からは秋篠宮紀子様が私の理事長当時の結核病学会にご入会を頂くと共に原著論文の投稿・掲載を賜った御礼を申し上げるなど、思い出深い 2 日間でした。

この賞は、保健衛生の向上に著しい功績のあった団体や個人へ、厚生労働省・朝日新聞・NHK の後援の下、第一生命保険（株）が 1950 年から毎年贈呈している賞です。今年は 9 団体と個人 5 名が受賞し、私自身は、「減少の一途だったわが国の結核診療医の養成・増員を図るため結核病学会に認定制度を確立、会員数を逆転増加させると共に、2009 年の新型インフルエンザで世界に先駆けた効果的な対策指針の感染症学会からの発出を主導して世界最小の被害の実現に貢献した」ことが評価されました。東北大学出身の教授で 6 人目、加齢研では抗酸菌病研究所 2 代目所長の海老名敏明先生から 35 年ぶり 2 人目の受賞です。

東北大学の歴代受賞者では、古賀良彦先生（放射線科初代教授）が胸部 X 線間接撮影の開発と集団検診への応用、近藤正二先生（衛生学初代教授）は日本の長寿村の研究から食生活の重要性を啓蒙普及したことが評価されました。海老名敏明先生（抗研内科 2 代目教授）は結核研究成果の臨床還元、野田起一郎先生（産婦人科出身、近畿大学元学長）は子宮がん研究への貢献が評価されています。インフルエンザウイルスなど各種呼吸器病原ウイルスの分離法を確立

して受賞した沼崎義夫先生（細菌学出身、熊本大学元教授、国立仙台病院ウイルスセンター初代所長）からは、私の感染症学会と化学療法学会の評議員推薦を頂いています。感染症関連の受賞が多く、その末席に連なることが出来て光栄に思う次第です。

私自身は、最近の取組みが評価されました。2009 年 7 月に日本結核病学会理事長に選出され、すぐ学会の改革に着手しましたが、結核の順調な減少もあって会員数はピークの昭和 34 年の 4,100 名近くから 2,700 名まで減少中でした。しかし、結核患者がさらに減る将来、結核病棟に困り込んでの結核医療は現在の病棟制度では成り立たなくなります。わが国より先に結核が減った欧米諸国のように結核病棟を廃止し、一般病棟の中に陰圧設備を備えた少数の結核病床を設置する体制（その先駆けが厚生労働省のモデル病床事業）に変わらざるを得ません。そうしたユニット病床を二次医療圏に 1～数か所設置する時代には、結核が点（現在の結核病院・病棟）で診る疾病から面（各地域の基幹病院）で診る疾病に代わっていき、他の疾患を診ながら少数の結核患者を診療する医師が多数必要になります。それを見据えて結核病学会に認定制度を確立し、教育プログラムを拡充しました。賛同された方々の学会への入会が相次ぎ、2 期 4 年間の理事長職を辞した今春には会員数が 3,700 名まで増えました。事情が分からない方々は「結核患者がどんどん減るのになぜ、学会員を増やすのか？」と聞いてきますが、将来の結核医療を支える医療者側の体制を構築し、評価されたものですし、理事長職を辞する前にはコ・メディカルも増員すべく「結核・抗酸菌症エキスパート制度」を確立し、医師以外の会員数も増え始めました。

インフルエンザの方も、2009 年 1 月設置の日本感染症学会新型インフルエンザ対策委員会の委員長に就任後の仕事が評価されました。こ

の委員会は、厚生労働省が進めていた「次の新型は高病原性鳥インフルエンザ H5N1 が想定され、甚大な被害が予想されるので、空港検疫や発熱外来を含めた厳重な対応策を構築する」という政策に再考を迫る目的で設立されました。鳥インフルエンザが直接、ヒトの間で広範なパンデミックを起こした歴史は確認されておらず、すべてブタを介してですから、起こり得る「新型」は限られます。果たして 2009 年 4 月、H5N1 ではなくインフルエンザ H1N1pdm2009 がブタを介してヒトで感染し始め、瞬く間に世界に広がりました。厚労省の想定とは全く異なりました。対応策を確立すべく、草案の段階から私が文章を全て書き、委員と学会理事の数度の校閲を経て、最初の「提言」を 2009 年 5 月 21 日、学会のホームページ上に発表しました。国内発症第一例から 6 日後、世界で最初のガイドラインであり、学会ホームページのヒット数は激増し、国会の委員会質問でも取り上げられました。ただ、その後に出た WHO や米国 CDC (Centers for Disease Control and Prevention) のガイドラインが若年者への抗インフルエンザ薬投与を抑える消極策だったのに対し、我々のガイドラインは早期から広く投与する積極策でしたから議論が巻き起こりました。世界標準 (=WHO や CDC) に反する感染症学会のガイドラインはおかしい、というものでしたが、2009 年後半に日本以外の多くの国で若年層に死亡が多発するに及んで 2010 年 1~2 月、WHO と CDC は積極的な投与策に変わりました。我々の方針が世界標準になったのです。我々を批判していた方々はメディアを含めてぴたりと口を閉ざしましたが、海外の方針を鵜呑みにするのではなく、自らの頭で考えるべきだと思った次第です。厚労省もいつしか、新しい抗インフルエンザ薬を承認するたびに我々の使用指針を頼るようになりました。批判していた相手から表彰された訳ですが、やはり、自ら考え

るべきです。

内心忸怩たる思いが一つあります。受賞の功績が、私の追求してきたものと少し異なるのです。私の本務は、ワクチンや抗体製剤も含む抗感染症薬の臨床開発を担うことであり、私の部門の名称はそれを具体化しています。現在、理事長を務める公益社団法人日本化学療法学会の任務でもありますが、医学部学生時代に書いた最初の総説論文も、当時問題となっていた養殖漁業の飼料への抗菌薬添加による環境中の薬剤耐性菌増加を取り上げたものでした。ところが、今回の受賞の対象は、恩師の今野 淳先生・大泉耕太郎先生からの影響で途中から始めた結核、さらに医局の先輩の庄司 眞先生 (宮城野区でご開業、80 歳以降に感染症学会誌や Tohoku Journal に原著論文を掲載) に感化されて首を突っ込んだインフルエンザに関するものです。本来の務めもきちんと果たさなければなりません。

ここで紙面を少しお借りして拝謁の際の様子を記します。10 月 24 日の 14 時前に皇居内の長和殿 (宮中参賀で皇族方が揃うところ) に参集し、14 時 30 分に比較的小さなお部屋で、両陛下の拝謁を賜りました。お言葉を賜った後、両陛下ご退去の際に、天皇陛下から「渡辺さんはどのようなことをやっていたらっしゃいました?」とのご質問を賜りました。「結核とインフルエンザに関して…」とお答えしたら、「最近耐性結核菌も増えているようで、…」とおっしゃるので、「日本はお薬の使い方が比較的適正で、結核菌以外も含めて耐性菌は海外よりは少ないですよ」とお答えしました。また、「インフルエンザでは実際にどのような…?」とおっしゃるので、「海外は抗インフルエンザ薬の使い方が消極的で特に若い方の死亡が多かったのですが、私たちは学会から積極的な投与指針を出しました。」とお答えしたら、「そうですね、日本は亡くなられた方が少なかったですね。」

とお答えが返って参りました。続いて美智子さまのお話では私から「秋篠宮紀子様には結核病学会へのご入会と学会誌への論文投稿・掲載を賜り、誠にありがとうございます。」と御礼を申し上げます。「そうですね、秋篠宮妃は結核のことを大変、心に掛けておりますから…」との美智子さまのお答えと共に、妻にもお声をかけて頂きました。拝謁を賜った15名中、直接お話ししたのは3名のみでしたが、私の時間が一番長かったようでした。終わってから、皇居内の中庭や正殿、豊明殿（宮中晩さん会などを行うところ）などを中から見せて頂きました。雨が降っていたため、皇居内散策の代わりでしたが、かえって良かったようで、ここまで見られることは滅多にないとのことでした。

最後に、当研究所初めての受賞者の海老名敏明先生は、私の母校（山形東高[旧制山形中学]）の50年先輩です。私は結核病学会長を50年後に務め、保健文化賞を35年後に受賞しましたが、海老名先生は晩年、仙台厚生病院での総回診や外来に付いた際、よく私に「君は僕のちょうど50年後輩だね〜」と何度もおっしゃっていました（前におっしゃったのを何度も忘れていらっしやったようです）。これまでの私の研究や医療への貢献の場を与えて頂いた東北大学と加齢研、抗研・加齢研内科同窓会の皆様、寄附部門を支えて頂いている皆様に深く感謝を申し上げますと共に、海老名先生の御霊にご報告申し上げるものです。

## 【随 想】

### 京都からの便り

京都大学大学院人間・環境学研究科

月 浦 崇

震災直後の2011年4月から、3年ほどお世

話になった加齢研を後にし、京都大学人間・環境学研究科に着任いたしました。今回、川島研の秘書である小林さんから「加齢研ニュースの随想に何か書いてほしい」と依頼を受けました。二つ返事で快諾したものの、実は何を書けばいいのか皆目見当がつかず、結局は私の現在の職場の紹介でお茶を濁させていただこうかと思っております。

さて、私の現在の職場であります「京都大学」はみなさん良くご存じかと思いますが、「人間・環境学研究科」（私たちは愛着をこめて「ジンカン」と呼びます）とは一体どのような部局なのか想像できますでしょうか？ 京都大学の通則には、以下のように記載されています。

“人間・環境学研究科は、環境、自然、人間、文明、文化を対象とする幅広い学問分野の連携を通じて、人間と環境のあり方についての根源的な理解を深めるとともに、人間と環境のよりよい関係を構築するための新たな文明観、自然観の創出に役立つ学術研究を推進することを目指す”

これを読んでいったい何をしているところなのか、もしすぐに想像できる方がいたら素晴らしい読解力があると思うのですが、正直言って私は着任してみるまでジンカンが一体どんな部局なのか、そしてそこがどれだけユニークなところなのか、十分には理解していませんでした。しかし、このジンカンは、「何でもあり」の混沌の中に、実はこれからの新しい価値観を創出するために大切な要素が詰まっている場所なのだ、最近では認識を新たにしているところです。

もともとジンカンは旧教養部を母体としている部局であり、現在もその教員は京大の教養教育の中心を担っている部局でもあります。ですから、教員の専門は教養科目の数だけあり、哲学から物理学、日本国憲法からアラビア語まで、はっきり言って何でもアリです。ですから教授会は毎回異文化体験みたいなもので、具体

的な事案はここでは記述しませんが、なかなか興味深い議論が繰り返されます。しかもこのような多様性は何も教員に限った事ではなく、学生もまた教員に輪をかけて多彩な人材に溢れています。そもそも、ジンカンの学部である「総合人間学部」（私たちはここでも愛着を込めて「ソウジン」と呼びます）には、文系の入試で入学してくる学生と理系の入試で入学してくる学生が混在しており、しかも入ってから「ガラガラボン」されますので、学生の多様性も推して知るべしと言うわけです。ですから、ソウジンやジンカンは「Universityの中のUniversity」とか、「京大の中でもっとも京大らしい」とか言われています。もちろんそこには良い意味（例えば「おもしろソウジン」）も悪い意味（例えば「ひまソウジン」）も含まれていますが、自分の好みを言えば、私はこの多様性のあるジンカンやソウジンの雰囲気がかえって嫌いではありません。

多様性というのは、新しい何かが創造されるためには必要な土壌であると思います。もちろんそこには、現代的な価値観で考えた場合に素晴らしい輝きを放つかもされないダイヤモンドもあれば、磨いても全く輝くことのない石ころもあるでしょう。ですから、多様な価値観をもつ世界は、効率性という観点からすれば、無駄も多く良くない面も多々あるのは事実であると思います。しかし一方では、価値観が多様であるからこそ、単に石ころだと思っていたものが、ある時にダイヤモンド以上の価値をもつものと再認識されたりと、多くの価値が異なった次元で認められ、現代的な価値観だけでは量ることのできない、将来的な新たな可能性も広がると言えます。私が専門とする認知神経科学は、まさにこの多様性が重要な価値観を持つ分野であり、新たな価値観が日々創造されています。今や、多様な分野が神経科学を媒体として結びつき、一昔前では考えもつかなかった「神経経済

学」や「神経倫理学」、あるいは「ブレイン・マシン・インターフェース（BMI）」などが、重要なトピックのひとつとして、世界中で研究が進められています。もし多様性がなければ、おそらくこのような新しい研究分野が開拓されることはなかったことでしょう。そのような意味からも、私がジンカンやソウジンにご縁を頂いたのは、「新しい何かを創り出せ」ということなのかもしれないと、肝に銘じているところです。

私が川島研に在職した3年の間にも、研究室内では多様な人材と思いつかないテーマが、常時化学反応を起こしながら、（よく分からないカオス状態を経由しながらも）新しいブレークスルーへ向けて動いておりましたし、きっと今もその動きは速まりこそすれ、留まることなく続いていることと思います。そして私は今、その流れを少しでもこの京都の地に受け継ぎ、新しい「化学反応」を起こそうと「ソウジン」や「ジンカン」の学生とともに日々努力を続けているところです。まだまだできたばかりの若い研究室で、川島研のように「うま味」のある反応が多く出てくるわけではありませんが、ぜひ仙台から皆さんの暖かい目で見守っていただければと思う今日この頃です。

## 【研究員会便り】

研究員会委員長 杉 浦 元 亮

震災以来「生きる力」とはいったい何なのか考えています。

生きる力というのは、前世紀末「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」という文部大臣の諮問に対する中央教育審議会の答申（1996）に盛り込まれた理念で、こんなふう

に説明されています。「…これからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つ

け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性である…」

お役所らしいね、とか、未だに全然学校教育に反映されてないよね、とからかうのは簡単ですが、いやどうして、じっくり考えてみると実に重い理念です。私は震災後に本学に設立された災害科学国際研究所に勤務し、被災者の方を対象に被災の人間・社会的側面についてインタビュー調査などをしてきました。震災後の混乱の中で生きることとか生きる理由について、いろいろ考えたことが動機になっています。そのインタビュー調査の中で、津波の極限状態や復興の重い課題を背負った方々の言葉の端々に、この生きる力の理念と重なる想いを垣間見えました。

極限状態ならともかく、現在の普通の日常世界に生きる研究者には無縁の理念という考えもあるかもしれません。でも、ほんとうにそうでしょうか？ 試しに最初の「子供たち」を「研究者」に読み替えて読んでみて下さい。前半には実に恐ろしいことが書いてあります。我々は研究費獲得を目指して、研究のトレンドばかり追ってはいないでしょうか。後半はどうでしょうか。ピンとこない人が多いのではないのでしょうか。実は後半にこそこの理念の我々に対する強いメッセージが込められているのです。この理念は、多数の高学歴の理系学生が東京の地下鉄で化学兵器テロ事件を引き起こしたオウム真理教事件を受け、高等教育のあり方を抜本的に見直す社会的動きの中で出て来たものなのです。例えば、我々は生命倫理や研究倫理に対する市井の人々の懸念にしっかり向き合っているのでしょうか。

偉そうなことを書いてしまいましたが……、え？ 最初の「子供たち」を「研究会委員長」

に読み替えて読んでみる？ あ痛たたた、もうちょっと勉強して出直してきます。

では、今年度上半期の研究会の活動をご報告申し上げます。

研究会活動内容(平成25年6月～11月まで)

加齢研研究会セミナー

<http://www.idac.tohoku.ac.jp/ja/activities/seminars/130925/index.html>

日時：平成25年9月25日(水)午後1時～

場所：加齢研 SA 棟 国際会議室

講師：森本 充 Mitsuru Morimoto

所属：独立行政法人 理化学研究所、発生・再生総合科学研究センター

呼吸器形成研究チーム、チームリーダー

演題：呼吸器上皮細胞の適切な空間配置は Notch シグナルによって調整される

担当：渡邊 裕介 (所属 神経機能情報研究分野・内線 8596)

平成25年度加齢研生化学セミナーについて

平成22年度より生化学セミナーは毎回2研究室、時期は6月、9月、11月、2月に行なうことになりました。

第1回生化学セミナー

担当：免疫遺伝子制御研究分野、遺伝子導入研究分野

日時：平成25年7月4日(木)午後4時から5時10分

会場：加齢研 SA 棟 国際会議室

<http://www.idac.tohoku.ac.jp/ja/activities/seminars/pdf/130704.pdf>

1. 自己免疫疾患発症における Fcgr2b 遺伝子の役割

有罪，無罪，そして…

講師：遺伝子導入研究分野 金成 安慶

## 2. 家族性乳癌原因遺伝子産物 BRCA1 の機能解析

その癌抑制機構の解明と癌の診断・治療への応用

講師：免疫遺伝子制御研究分野 千葉奈津子

連絡先：加齢医学研究所・研究員会事務局  
齋藤 内線：8576

## 第2回加齢研生化学セミナー

担当：病態臓器構築研究分野，基礎加齢研究分野

日時：平成25年10月3日（木）午後4時から

場所：加齢研 SA 棟 国際会議室

<http://www.idac.tohoku.ac.jp/ja/activities/seminars/pdf/131003.pdf>

### 1. 原発事故後に被ばくした家畜や野生動物の放射線影響研究

被災動物の包括的線量評価事業における現状報告

講師：病態臓器構築研究分野 漆原 佑介

### 2. 小分子化合物結合タンパクの探索・解析

その化合物が標的とするタンパクは何でそれはどう作用するのか。

そしてそれを生かせるのか。

講師：基礎加齢研究分野 木村 朋寛

連絡先：加齢医学研究所・研究員会事務局  
齋藤 内線：8576

## 第3回加齢研生化学セミナー

担当：医用細胞資源センター 加齢ゲノム制御プロテオーム寄附研究部門

日時：平成25年12月13日（金）午後4時から

場所：加齢研 SA 棟 国際会議室

## 第140回集談会（H25.6.29）での研究員会第23回発表コンテスト

今回の受賞者は前田郁麻先生（医用細胞資源センター），中山勝文先生（生体防御学分野）になりました。おめでとうございます。表彰式は1月の新年会にて行ないます。

研究員会主催スポーツ大会（ボーリング）

日時：平成25年10月31日（木）18:30から仙台プレイボウリング

参加者：45名

分野別団体優勝は基礎加齢研究分野です。表彰は研究員会新年会にて行ないます。

今後の予定

## 第141回集談会（H25.1.17）での研究員会第24回発表コンテスト

研究員会主催新年会

日時：平成25年1月17日（金）第141回集談会終了後

昨年度と同様にポットラック形式で行なう予定です。

## 【研究会同窓会広報】

庶務幹事 佐藤 靖史

庶務報告

### 1. 研究会同窓会会員の確認（平成25年11月現在）

会員数 1,772名

（所内在籍者226名，所外789名（過去5年間の会費未納者は，253名で加齢研ニュースは送付しておりません。）海外82名，退会者283名，物故者248名，住所不明147名）

賛助会員 28施設

- 購読会員 17件  
 物故会員 (平成25年5月～平成25年11月までの間に事務局に連絡がありました。)  
 大津 英二先生 平成25年5月14日  
 手島 建夫先生 平成25年7月5日
2. 第140回集談会  
 日 時: 平成25年6月29日(土)  
 午後12時30分から  
 場 所: 加齢医学研究所 スマート・エイ  
 ジング国際共同研究センター 国際会議室  
 一般口演 12題, 本橋ほづみ先生の新任教  
 授特別講演
3. 平成25年度加齢医学研究所研究会同窓会  
 総会, 講演会および懇親会  
 日 時: 平成25年6月29日(土)  
 総 会 集談会終了後  
 講演会 加齢医学研究所 スマート・エイ  
 ジング国際共同研究センター  
 国際会議室 17時45分  
 講 師: 田中 伸幸氏  
 (宮城県立がんセンター研究所・  
 がん先進治療開発研究部・部長,  
 東北大学大学院・医学系研究科・  
 連携講座・がん病態学分野・教授)  
 テーマ: 医療イノベーションで復  
 興を目指す — 岩沼の取  
 り組み —  
 懇親会 加齢医学研究所 中会議室  
 18時45分
4. The joint symposium of International symposium — New Horizon on Neuroscience of Development and Developmental Disorders — and the 47th IDAC Symposium, 29 November 2013  
 日 時: 平成25年11月29日(金)  
 9時20分～17時55分  
 場 所: 加齢医学研究所 スマート・エイ  
 ジング国際共同研究センター 国際会議室  
 世話人: 瀧 靖之(機能画像医学研究分野)  
<http://www2.idac.tohoku.ac.jp/ndd2013/>
5. 加齢研ニュース発行  
 59号 平成25年6月  
 60号 平成25年12月
- 今後の予定
1. 第141回集談会  
 日 時: 平成26年1月17日(金)  
 午後1時から  
 場 所: 加齢医学研究所 スマート・エイ  
 ジング国際共同研究センター 国際会議室  
 一般口演  
 瀧靖之先生の新任教授特別講演
2. 第14回動脈硬化教育フォーラム in Sendai  
 日 時: 平成26年2月2日(日)  
 場 所: 仙台国際センター  
 世話人: 佐藤 靖史(腫瘍循環研究分野)
3. 第48回加齢研シンポジウム/第5回加齢  
 医学研究拠点シンポジウム  
 日 時: 平成26年4月18日(金)  
 場 所: 加齢医学研究所 スマート・エイ  
 ジング国際共同研究センター  
 世話人: 佐藤 靖史(腫瘍循環研究分野)
4. 平成26年度加齢医学研究所研究会同窓会  
 総会, 講演会および懇親会  
 日 時: 平成26年6月28日(土)  
 総 会 集談会終了後  
 講演会 加齢医学研究所 スマート・エイ  
 ジング国際共同研究センター 国際会議室  
 講 師: 吉田 浩 氏  
 (東北大学大学院経済学  
 研究科・加齢経済・財政  
 学担当 教授)

テーマ：加齢経済学で予測する

「極」高齢社会の日本

懇親会 加齢医学研究所 中会議室

5. 加齢研ニュース発行

61号 平成26年 6月

62号 平成26年12月

[編集後記]

加齢研ニュース60号をお届け致します。今号では、恒例となっております、新任教授の先生や加齢研を離れた先生によるご寄稿に加えて、第65回保健文化賞を受賞され、皇居にご拝謁されました渡辺彰先生に寄稿頂きました。大変貴重なご経験について記載して頂きまして、ありがとうございました。瀧靖之先生には、58号で東北大学東北メディカル・メガバンク機構の新任教授としてご寄稿頂いたばかりだったのですが、今回は、改めて加齢医学研究所の新任教授としてご寄稿頂きました。また、2011年4月に京都大学に移られた月浦崇先生にも寄稿頂きました。これからも加齢研ニュースが、加齢研関係者のよりよい交流の場として機能していけますよう、加齢研ニュースにご支援、ご協力をお願い致します。

(千葉奈津子)